

## 主の日の到来の予告

ヨエル書 1 章

ああ、その日はわざわざいだ。主の日は近く、全能者からの滅びのように来るからである。(15)

ヨエルによって告げられたこの預言の言葉は、「主の日」が主題とされていることから、ユダ王国の滅亡を前にして、民に悔い改めを迫るために語られた言葉だと思われれます。

ここにはかつてなかつたほどのいなごの大軍によって、あらゆる作物が食い尽くされ、地が完全に荒廃し、飢饉が人々を苦しめる様子が描かれています。このような未曾有の大災害にあたり、ヨエルは「泣き悲しめ」(8)と叫びます。民衆はヨエルに促されなくても、この大災害のゆえに嘆き悲しんでいました。けれどもヨエルが人々の注意を喚起したのはいなごの災害に対してではなく、迫り来る「主の日」に対してでした。いなごによる大災害は、それよりもはるかに恐ろしい「主の日」が近づいていることの予兆であるとヨエルは理解したのです。人々は目の前の災害に対しては嘆いても、その目を「主の日」に向けることはありませんでした。それゆえヨエルは人々に向かって主による決定的な審きの日に対してこそ心を向け、その日に備えるべきことを告げたのです。

ヨエルの言葉は今のわたしたちにも語られています。世界で起こる様々な災害を目にするとき、迫りつつある「主の日」に対してこそ備えなければなりません。「万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい」(第一ペテロ四7)。